

07 発育発達

キーノートレクチャー

8月29日(木) 9:00 - 9:30 [B] コーニングハウスⅠ 1階 C106

震災後の子どものこころとからだの現状と課題

日本の子どもたちの真の復興は福島から

司会：國土 将平（神戸大学）

演者：菊池 信太郎（医療法人仁寿会菊池医院・菊池記念こども保健医学研究所、復興庁復興推進委員会委員）

東日本大震災から2年が経過しました。放射線汚染によって生活環境が一変してしまった福島の子どもたちには今何が起こっているのでしょうか？子どもたち（保護者）が抱える問題が依然として大きく立ちはだかっているのにもかかわらず、急速に風化と忘却は進行し、現地ですら危機感が希薄になりつつあります。

私たちは子どもたちを守り、健康に育みたい一心から様々な事業を関係者と連携しながら行ってきました。①遊び場作り：体力や運動能力の低下が懸念されました。屋内でも十分な広さとおもしろさを兼ね備えた遊び場の設置が急務であり、震災からわずか9ヶ月後に地元の企業の支援により、市内に巨大な屋内遊び場（PEP Kids Koriyama）を開設しました。1年間に40万人の親子が訪れ、子どもたちに質の高い遊びを提供していることが証明されました。②子どもの現状調査：平成24年度に、市内の全小中学校生を対象にした新体力テストを実施しました。全国平均と比して体重増加が顕著であり、ほとんどの体力テスト項目において劣っている結果でした。子どもの生活習慣、食生活を併せて今後10年間継続調査を実施します。③運動遊びの啓発：月1回の運動実技講習会を中心に、啓発活動を行っています。こうした多くの対策は、専門家のボランティアや一部の団体、趣旨に賛同した企業の支援によって成り立っているのが実情で、今後は国や行政が中心となった取り組みが必要です。

被災地の子どもたちが抱える問題の多くは、実は全国共通であり、特に福島では浮き彫りされたに過ぎません。子どもたちが健康に育つためには必要な事は何かを考えなくてはなりません。私は、まず福島の子どもたちを『日本一元気に』することが、唯一の彼らへの償いだと思います。福島の子どもたちが心と体を健やかに育む環境を得たとき、日本の子どもたちが皆元気な心と体を持てる本当の未来が見えてくると信じています。

発

シンポジウム

8月29日(木) 9:40 - 11:40 [B] コーニングハウスⅠ 1階 C106

震災後の子どもの育みを保障するために

司会：春日 晃章（岐阜大学）

〈趣旨〉

2011年3月に発生した東日本大震災とその後の原発事故は、多くの人々に直接的な被害をもたらしただけでなく、PTSDの発生や体力低下といった心身の健康に多大な影響を及ぼしている。特に環境の変化に敏感な子どもにおいては、その発育発達に大きな影響を及ぼすことが懸念されている。

津波被災地の子ども達は、恐怖体験の記憶によるストレスを抱える一方、校庭や空き地などの成育空間の喪失といった非日常の生活が長期化している。低線量放射能環境下にある福島県の子ども達は、屋外活動制限による生活環境の変化から運動不足に陥っており、生活習慣病の増加、体力の低下、ストレスの増大が予想される。

本シンポジウムでは、震災後の子ども達の豊かな心と健やかな体の育みを保障するために、被災地の子ども達の実態を調査研究し、それをもとにした具体的な取組を実施されている3名のシンポジストにご登壇いただく。

岡崎勘造氏（東北学院大学）には、宮城県女川町の児童生徒への取組と現状に関して、子ども達の活動状況の実態と、健やかな成長を促す取組として実施している身体活動推進事業について紹介していただく。

中村和彦氏（山梨大学）には、低線量放射線環境下にある福島県郡山市の子どもの体力・運動能力の現状と、室内型の遊び場の設置、運動遊び研修会の実施、子どもの育成に関わる人々との連携に関して報告していただく。

「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」の小出拓己氏からは、被災地域の子ども達の健やかな育みを総括的に支援している立場から、具体的な支援内容とその効果に関してお話しいただく。

被災地域の子どもの育みを保障する取組が、日本全国の子どもの元気に結びつくことをとらえながら、活発な議論を進めていきたい。